

あとがき

この本の出版を後押ししたのは、「核兵器禁止条約」の発効であった。また、37年前の1985年から幡多高校生ゼミナールが核実験被災調査を開始したことが、改めて世界から注目され始めたことだと思う。ビキニ核被災者の死亡や病状の深刻化に寄り添いながら、事件の実相を記録していくという厳しい活動の積み重ねであった。「政治決着」された事件であるために、この調査は資料入手に大変な時間を要したが、被災漁船員と遺族の方々や調査にかかわったマスコミ関係者、平和問題研究者、放射線被ばく研究者など多くの人々が支え続けてくれた。そして、2011年3月11日の福島原発事故は、その汚染の規模と海洋汚染の長期化において最もビキニ事件と似ていた。ビキニ事件の解明は、原発事故のこれからを見通し、同じ道を歩まないための記録となることから、ビキニ事件に光があてられた。

幡多高校生ゼミナールは、コロナ渦と現場教員の多忙化により活動が一時休止状態であり、新たに地域探求の学生・社会人共同の生涯学習サークルとして「高知探求ゼミナール」の結成準備中である。幡多高校生ゼミナールのビキニ事件調査から発足した「太平洋核被災支援センター」は、現在、「ビキニデーin高知」の取り組みや核兵器禁止条約の普及を求めて国際的なネットワークとの連帯を進めている。

編集にあたって、幡多高校生ゼミナールの活動ごとに高校生の感想を中心とした「記録集」を作成し資料として長年積み重ねてきたのが幸いした。また、『ビキニの海は忘れない』『もうひとつのビキニ事件』（平和文化）、『海光るとき』（民衆社）の本があった。

本書の写真の大半は、カメラマンの奈路広さんの作品である。奈路さんは、高校生たちの調査の初期から、ずっと同行し、気さくで大らかな気質から高校生たちから「ナロッパー」と呼ばれていた。いつか高校生たちは、奈路さんのカメラを意識しないようになり、高校生たちが自分の写真を見て驚くような表情を記録していった。奈路さんは、事故で入院し、現在自宅で療養しているが、撮り続けた写真を惜しげもなく提供していただいた。

岡村啓佐さんには、奈路さんのビキニ事件関係のネガフィルムを保存され、自ら被災漁船員・遺族を訪問して記録した写真を提供していただいた。

福島での高校生たちの集会の写真は、主に粕谷たか子さんが撮られた。粕谷さんは、幡多高校生ゼミナールが「焼津平和賞」を受賞した時から、福島集会まで同行され、さらに「愛吉・すずのバラ」の普及まで静岡・高知・福島を結ぶネットワークづくりをされた。そして、ジャーナリストの笹島康仁さんや福島の高校教員の斎藤毅さん、全国の高校生平和ゼミナール顧問など、核被災に向きあって活動しているの方々からも協力していただいた。

本書を刊行していただいた「すいれん舎」の高橋雅人さんは、激励のため遠路の高知・幡多地域に2度訪問された。本書の原稿と写真の校正を含めて編集全般を担当した「ことふね企画」の山本規雄さんには編集に不慣れな私たちのために大変ご苦勞をかけ、写真と記述を解りやすくするためにご助言いただいた。

最後に、今までの調査や活動へのご支援、この本の編集にあたってご協力いただいたすべての方々にお礼申し上げます。